

おじいさんのランプ

新美

南吉

かくれんぼで、倉のすみにもぐりこんだ東一君がランプを持って出てきた。

それはめずらしい形のランプであった。八十センチぐらいの太い竹の筒が台になっていて、その上にちよっぴり火のともる部分がくっついていて、そしてほやは、細いガラスの筒であった。はじめてみるものにはランプとは思えないほどだった。

そこでみんなは、むかしの鉄砲とまちがえてしまった。

「なんだア、鉄砲かア。」と鬼の宗八君はいった。

東一君のおじいさんも、しばらくそれがなんだかわからなかった。眼鏡ごしにじつとみていてから、はじめてわかったのである。

ランプであることがわかると、東一君のおじいさんはこういって子どもたちをしかりはじめた。

「こらこら、お前たちは何を持ち出すか。まことに子どもというものは、だまって遊ばせておけば何を持ち出すやらわけのわからん、油断もすきもない、ぬすつと猫のようなものだ。こらこら、それはここへ持ってきて、お前たちは外へいって遊んでこい。外にいけば、電信柱でもなんでも遊ぶものはいくらでもあるに。」

こうしてしかられると子どもははじめて、自分がない行ないをしたことがわかるのである。そこで、ランプを持ち出した東一君はもちろんのこと、何も持ち出さなかった近所の子どもたちも、自分たちみんなでわるいことをしたような顔をして、すごすごと外へ道へ出ていった。

外には、春の昼の風が、ときおり道のほこりをふき立ててすぎ、のろのろと牛車を通ったあとを、白い蝶がいそがしそうに通ってゆくこともあった。なるほど電信柱があっちこっちに立っている。しかし子どもたちは電信柱なんかで遊びはしなかった。おとなが、こうして遊ぶといったことを、いわれたままに遊ぶというのはなんとなくばかげているように子どもには思えるのである。

そこで子どもたちは、ポケットの中のラムネ玉をカチカチいわせながら、広場の方へとんでいった。そしてまもなく自分たちの遊びで、さっきのランプのことはわすれてしまった。

日ぐれに東一君は家へ帰ってきた。奥の居間のすみに、あのランプがおいてあった。しかし、ランプのことを何かいうと、またおじいさんにかみかみいわれるかも知れないので、だまっていた。

夕ご飯のあとの退屈な時間がきた。東一君はたんす

にもたれて、ひき出しのかんをカタンカタンといわせていたり、店に出てひげをはやした農学校の先生が『大根栽培の理論と実際』というような、むつかしい名前の本を番頭に注文するところを、じっとみていたりした。

そういうことにもあくと、また奥の居間にもどってきて、おじいさんがいないのをみすまして、ランプのそばへにじりより、そのほやをはずしてみたり、五錢白銅貨ほどのねじをまわして、ランプのしんを出したりひっこめたりしていた。

すこしいっしょうけんめいになっていじくっていると、またおじいさんにみつかってしまった。けれどこんどはおじいさんはしからなかった。ねえやにお茶をいいつけておいて、すっぽんと煙管筒をぬきながら、こういった。

「東坊、このランプはな、おじいさんにはとてもなつかしいものだ。長いあいだわすれておったが、きょう

東坊が倉のすみから持ち出してきたので、またむかしのことを思い出したよ。こうおじいさんみたいに年をとると、ランプでもなんでもむかしのものに出合うのがとてもうれしいもんだ。」

東一君はぼかんとしておじいさんの顔をみていた。

おじいさんはがみがみとしかりつけたから、おこつていたのかと思つたら、むかしのランプにあうことができて喜んでいたのである。

「ひとつむかしの話をしてやるから、ここへきてすわれ。」

とおじいさんがいった。

東一君は話がすきだから、いわれるままにおじいさんの前へいつてすわつたが、なんだかお説教をされるときのようで、いごちがよくないので、いつもうちで話をきくときにとる姿勢をとって聞くことにした。つまり、寝そべって両足をうしろへ立てて、ときどき足のうらをうちあわせる芸当をしたのである。

おじいさんの話というのはつぎのようであつた。

いまから五十年ぐらいまえ、ちょうど日露戦争のじぶんのことである。岩滑新田の村に巳之助という十三の少年がいた。

巳之助は、父母も兄弟もなく、親戚のものとしてひとりもない、まったくのみなしごであつた。そこで巳之助は、よその家の走り使いをしたり、女の子のように子守をしたり、米をついてあげたり、そのほか、巳之助のような少年にできることならなんでもして、村においてもらつていた。

けれども巳之助は、こうして村の人びとのお世話で生きてゆくことは、ほんとうをいえばいやであつた。子守をしたり、米をついたりして一生を送るとするなら、男とうまれたかいないかと、つねづね思つていた。男子は身を立てねばならない。しかしどうして身を立てるか。巳之助は毎日、ご飯をたべてゆくのがやつ

このことであつた。本一冊買うお金もなかつたし、またたとお金があつて本を買つたとしても、読むひまがなかつた。

身を立てるのによいきつかけがないものかと、巳之助はこころひそかに待つていた。

するとある夏の日のひるさがり、巳之助は人力車の先綱をたのまれた。

そのころ岩滑新田には、いつも二三人の人力ひきがいた。潮湯治（海水浴のこと）に名古屋からくる客は、たいてい汽車で半田まできて、半田から知多半島西海岸の大野や新舞子まで人力車でゆられていったもので、岩滑新田はちょうどその道すじにあたつていたからである。

人力車は人がひくのだからあまりはやくは走らない。それに、岩滑新田と大野のあいだには峠が一つあるから、よけい時間がかかる。おまけにそのころの人力車の輪は、ガラガラと鳴る重い鉄輪だったのである。

そこで、急ぎの客は、賃銀を倍出して、ふたりの人力ひきにひいてもらうのであつた。巳之助に先綱ひきをたのんだのも、急ぎの避暑客であつた。

巳之助は人力車のながえにつながれた綱を肩にかついで、夏の入陽のじりじり照りつける道を、えいやえいやと走つた。なれないこととてたいそう苦しかった。しかし巳之助は苦しさをなだ気にしなかつた。好奇心でいっぱいだった。なぜなら巳之助は、ものごころがついてから、村を一步も出たことがなく、峠の向こうにどんな町があり、どんな人びとが住んでいるか知らなかつたからである。

日がくれて青い夕闇の中を人びとがほの白くあちこちするころ、人力車は大野の町にはいった。

巳之助はその町でいろいろな物をはじめてみた。軒をならべてつづいてゐる大きい商店が、第一、巳之助にはめづらしかつた。巳之助の村にはあきないやとは一軒しかなかつた。駄菓子、わらじ、糸くりの道具、

膏藥、貝殻にはいった目薬、そのほか村で使っていた物の物を売っている小さな店が一軒きりしかなかったのである。

しかし巳之助をいちばんおどろかしたのは、その大きな商店が、一つ一つもしている、花のように明るいガラスのランプであった。巳之助の村では夜はあかりなしの家が多かった。まっくらな家の中を、人びとは盲のように手でさぐりながら、水がめや、石臼や大黒柱をさぐりあてるのであった。すこしぜいたくな家では、おかみさんが嫁入りするとき持ってきたあんどんを使うのであった。あんどんは紙を四方にはりめぐらした中に、油のはいった皿があって、その皿のふちにのぞいている燈心に、桜のつぼみぐらいの小さなほのおがとみると、まわりの紙にみかん色のあたたかな光がさし、付近はすこし明るくなったのである。しかしどんなあんどんにしろ、巳之助が大野の町でみたランプの明るさにはとてもおよばなかった。

それにランプは、そのころとしてはまだめずらしいガラスでできていた。すすけたり、やぶれたりしやすい紙でできているあんどんより、これだけでも巳之助にはいいもののように思われた。

このランプのために、大野の町ぜんたいが竜宮城かなにかのように明るく感じられた。もう巳之助は自分の村へ帰りたくないと思つた。人間はだれでも明るいとところから暗いところに帰るのをこのまないのである。

巳之助は駄賃の十五銭をもらうと、人力車ともわかれてしまつて、お酒にでもよつたように、波の音のたえまないこの海辺の町を、めずらしい商店をのぞき、美しく明るいランプにみとれて、さまよっていた。

呉服屋では、番頭さんが、椿の花を大きくそめ出した反物を、ランプの光の下にひろげて客にみせていた。穀屋では、小僧さんがランプの下であずきのわるいのを一粒ずつひろい出していた。またある家では女

の子が、ランプの光の下に白くひかる貝殻をちらしておはじきをしていた。またある店ではこまかいたまに糸を通して数珠をつくっていた。ランプの青やかな光のもとでは、人びとのこうした生活も、物語か幻燈の世界のように美しくなつかしくみえた。

巳之助はいままでなんども、「文明開化で世の中がひらけた。」ということを書いていたが、いまはじめて文明開化ということがわかったような気がした。

歩いているうちに、巳之助は、さまざまなランプをたくさんつるしてある店のまえにきた。これはランプを売っている店にちがいない。

巳之助はしばらくその店のまえで十五銭をにぎりしめながらためらっていたが、やがて決心してつかつかとはいっていった。

「ああいうものを売ってくれや。」

と巳之助はランプをゆびさしていった。まだランプとということばを知らなかったのである。

店の人は、巳之助がゆびさした大きいつりランプをはずしてきたが、それは十五銭では買えなかった。

「まけとくれや。」

と巳之助はいった。

「そうはまからん。」

と店の人は答えた。

「卸値で売ってくれや。」

巳之助は村の雑貨屋へ、作ったわらじを買ってもらいによくいったので、物には卸値と小売値があつて、卸値は安いということを知っていた。たとえば、村の雑貨屋は、巳之助の作った瓢箪型のわらじを卸値の一銭五厘で買いつつて、人力ひきたちに小売値の二銭五厘で売っていたのである。

ランプ屋の主人は、みも知らぬどこかの小僧がそんなことをいったので、びっくりしてまじまじと巳之助の顔をみた。そしていった。

「卸値で売つて、そりゃ相手がランプを売る家なら

卸値で売ってあげてもいいが、ひとりひとりのお客に卸値で売るわけにはいかな。」「

「ランプ屋なら卸値で売ってくれるだのイ?」

「ああ。」

「そんなら、おれ、ランプ屋だ。卸値で売ってくれ。」

店の人はランプを持ったまま笑い出した。

「おめえがランプ屋? はッはッはッはッ」

「ほんとうだよ、おツつあん。おれ、ほんとうにこれからランプ屋になるんだ。な、だからたのむに、今日(こんにち)は一つだけんど卸値で売ってくれや。こんどくるときや、たくさん、いっぺんに買うで。」

店の人ははじめ笑っていたが、巳之助の真剣(まけん)なように動かされて、いろいろ巳之助の身の上をきいたうえ、

「よし、そんなら卸値でこいつを売ってやろう。ほんとは卸値でもこのランプは十五銭じゃ売れないけど、おめえの熱心なのに感心した。まけてやろう。そのか

わりしつかりしようばいをやれよ。うちのランプをどんどん持ってって売ってくれ。」

といつて、ランプを巳之助にわたした。

巳之助はランプのあつかい方を一通り教えてもらい、ついでにちようちんがわりにそのランプをともして、村へむかった。

藪(やぶ)や松林のうちつづく暗い峠道(とうげみち)でも、巳之助はもうこわくはなかった。花のように明るいランプをさげていたからである。

巳之助の胸(むね)の中にも、もう一つのランプがともっていた。文明開化(ぶんめいけいか)におくれた自分の暗い村に、このすばらしい文明の利器(りき)を売りこんで、村人たちの生活を明るくしてやろうという希望のランプが――

巳之助の新しいしようばいは、はじめのうちまるではやらなかった。百姓(ひやくしやう)たちはなんでも新しいものを信用しないからである。

そこで巳之助はいろいろ考えたあげく、村で一軒きりのあきないやへそのランプを持って行って、ただでかしてあげるからしばらくこれを使ってくださいとたのんだ。

雑貨屋のばあさんは、しぶしぶ承知して、店の天井に釘を打ってランプをつるし、その晩からともした。

五日ほどたって、巳之助がわらじを買ってもらいにくくと、雑貨屋のばあさんはにこにこしながら、こりゃたいへん便利で明るうて、夜でもお客がようきてくれるし、釣銭をまちがえることもないので、気に入ったから買いますよ、といった。その上、ランプのよいことがはじめてわかった村人から、もう三つも注文のあったことを巳之助にきかしてくれた。巳之助はとびたつように喜んだ。

そこで雑貨屋のばあさんからランプの代とわらじの代をうけとると、すぐその足で、走るようにして大野

へいった。そしてランプ屋の主人にわけを話して、たりにないところはかしてもらい、三つのランプを買ってきて、注文した人に売った。

これから巳之助のしょうばいははやってきた。

はじめは注文をうけただけ大野へ買いにいていたが、すこし金がたまると、注文はなくてもたくさん買いこんできた。

そしていまはもう、よその家の走り使いや子守をすることはやめて、ただランプを売るしょうばいだけにうちこんだ。ものほし台のようなわくのついた車をして、たてて、それにランプやはやなどをいっぱいつるし、ガラスのふれあう涼しい音をさせながら、巳之助は自分の村や付近の村々へ売りにいった。

巳之助はお金ももうかったが、それとは別に、このしょうばいがたのしかった。いままで暗かった家に、だんだん巳之助の売ったランプがともってゆくのである。暗い家に、巳之助は文明開化の明るい火を一つ一

つともしてゆくような気がした。

巳之助はもう青年になっていた。それまでは自分の家としてはなく、区長さんのところの軒のかたむいた納屋に住ませてもらっていたのだが、小金がたまつたので、自分の家もつくった。すると世話してくれる人があったのでお嫁さんももらった。

あるとき、よその村でランプの宣伝をしておつて、「ランプの下なら畳の上に新聞をおいて読むことができるのイ。」と区長さんに以前きいていたことをいふと、お客さんのひとりが「ほんとカン？」とききかえしたので、嘘のきらいな巳之助は、自分でためしてみる気になり、区長さんのところから古新聞をもらつてきて、ランプの下にひろげた。

やはり区長さんのいわれたことはほんとうであった。新聞のこまかい字がランプの光で一つ一つはつきりみえた。「わしは嘘をいってしようばいをしたことにはならない。」と巳之助はひとりごとをいった。しかし

巳之助は、字がランプの光ではつきりみえてもなんにもならなかった。字を読むことができなかつたからである。

「ランプで物はよくみえるようになったが、字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃねえ。」

そういつて巳之助は、それから毎晩区長さんのところへ字を教えてもらいにいった。

熱心だったので一年もすると、巳之助は尋常科を卒業した村人のだれにもまけないくらい読めるようになった。

そして巳之助は書物を読むことをおぼえた。

巳之助はもう、男ざかりのおとなであった。家には子どもがふたりあった。「自分もこれでどうやらひとり立ちができたわけだ。まだ身を立てるといふところまではいいないけれども。」と、ときどき思つてみて、そのつど心に満足を覚えるのであった。

さてある日、巳之助がランプのしんをしいれに大野の町へやってくる、五六人の人夫が道のはたに穴をほり、太い長い柱を立てているのをみた。その柱の上の方には腕のような木が二本ついていて、その腕木には白い瀬戸物のだるまさんのようなものがいくつかついていた。こんな奇妙なものを道のわきに立てて何にするのだろう、と思いながらすこし先にゆくと、また道ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀が腕木にとまって鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十メートルぐらいあいだをおいては、道のわきに立っていた。

巳之助はついに、ひなたでうどんをほしている人にきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいうもんが今度ひけるだけな。そいでもう、ランプはいらんようになるだけな。」と答えた。

巳之助にはよくのみこめなかつた。電気のことなどまるで知らなかつたからだ。ランプのかわりになるも

のらしいのだが、そうとすれば、電気というものはあかりにちがいあるまい。あかりなら、家の中にともせばいいわけで、何もあんなとてつもない柱を道のくろに何本もおっ立てることはないじゃないかと、巳之助は思ったのである。

それから一月ほどたつて、巳之助がまた大野へいくと、このあいだ立てられた道のはたの太い柱には、黒い綱のようなものが数本わたされてあつた。黒い綱は、柱の腕木にのっているだるまさんの頭をいまきしてつぎの柱へわたされ、そこでまただるまさんの頭をいまきしてつぎの柱にわたされ、こうしてどこまでもつづいていた。

注意してよくみると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつだるまさんの頭のところでわかれて、家の軒端につながれているのであつた。

「へへえ、電気とやらいうもんはあかりがとるもんかと思つたら、これはまるで綱じゃねえか。雀や燕

のええ休み場というもんよ。」

と巳之助がひとりであざわらいながら、知り合いの甘酒屋にはいつてゆくと、いつも土間のまん中の飯台の上につるしてあった大きなランプが、横の壁のあたりにとりかたづけられて、あとにはそのランプをずっと小さくしたような、石油入れのついていない、変なかつこのランプが、丈夫そうな綱で天井からぶらさげられてあった。

「なんだやい、変なものをつるしたじゃねえか。あのランプはどこかわるくでもなったかやい。」

と巳之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありゃ、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明るうて、マッチはいらぬし、なかなか便利なもんだ。」

と答えた。

「ハッ、へんてこれんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘酒屋の店もなんだかまがぬけてしまった。客

もへるだろうよ。」

甘酒屋は、相手がランプ売りであることに気がついたので、電燈の便利なことはもういわなかった。

「なア、甘酒屋のとツつあん。みなよ、あの天井のこを。ながねんのランプのすすであそこだけ真黒になつとるに。ランプはもうあそこにいついてしまったんだ。いまになって電気たらいう便利なもんができたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみっこにひっかけられるのは、ランプがかわいそうよ。」

こんなふうには巳之助はランプの肩をもって、電燈のよいことはみとめなかった。

ところでまもなく晩になって、だれもマッチ一本すらなかったのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼のように明るくなったので、巳之助はびっくりした。あまり明るいので、巳之助は思わずうしろをふりむいてみたほどだった。

「巳之さん、これが電気だよ。」

巴之助は齒をくいしばって、ながいあいだ電燈をみつめていた。かたきでもにらんでいるようなかおつきであった。あまりみつめていて眼のたまがいたくなつたほどだった。

「巴之さん、そういつちやなんだが、とてもランプでたちうちができないよ。ちよつと外へくびを出して町通りをみてごらんよ。」

巴之助はむつつりと入口の障子しよじをあけて、通りをながめた。どこの家どこの店にも、甘酒屋のと同じように明るい電燈がともっていた。光は家の中にあまつて、道の上にまでこぼれ出ていた。ランプをみなれていた巴之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。巴之助は、くやしさに肩かたでいきをしなから、これも長いあいだながめていた。

ランプの、てごわいかたきが出てきたわい、と思った。いぜんには文明開化ということをよくいつていた巴之助だったけれど、電燈がランプよりいちだん進ん

だ文明開化の利器であるということとはわからなかった。りこうな人でも、自分が職しよくを失うかどうかというようなきには、物事の判断はんだんが正しくつかなくなることもあるものだ。

その日から巴之助は、電燈が自分の村にもひかれるようになることを、心ひそかにおそれていた。電燈がともるようになれば、村人たちはみんなランプを、あの甘酒屋のしたように壁のすみにつるすか、倉の二階にでもしまいこんでしまうだろう。ランプ屋のしょうばいはいらなくなるだろう。

だが、ランプでさえ村へはいつてくるにはかなりめんどろだったから、電燈となつては村人たちはこわがって、なかなかよせつけることではあるまい、と巴之助は、一方では安心もしていた。

しかしまもなく、「こんどの村会で、村に電燈をひくかどうかをきめるだけな。」といううわさをきいたときには、巴之助は脳天のうてんに一撃いちげきをくらったような気が

した。強敵きやうてきいよいよござんなれ、と思った。

そこで巳之助はだまってはいらなかった。村のひとのあいだに、電燈反対の意見をまくしたてた。

「電気というものは、長い線で山の奥おくからひっぱってくるもんだでのイ、その線をば夜中に狐きつねや狸たぬきがつたつてきて、この近ペんの田畠たはたをあらすことはうけあいだね。」

こういうばかばかしいことを巳之助は、自分のなれたしようばいを守るためにいうのであった。それをいうとき何かうしろめたい気がしたけれども。

村会がすんで、いよいよ岩滑新田の村にも電燈をひくことにきまったと聞かされたときにも、巳之助は脳天に一撃をくらったような気がした。こうたびたび一撃をくらってはたまらない、頭がどうかなくなってしまふ、と思った。

その通りであった。頭がどうかなくなってしまった。村会のあとで三日間、巳之助は昼間もふとんをひっかがぶ

つてねていた。そのあいだに頭の調子がくるってしまったのだ。

巳之助はだれかをうらみたくてたまらなかった。そこで村会で議長の役をした区長さんをうらむことにした。そして区長さんをうらまねばならぬわけをいろいろ考えた。へいぜいは頭のよい人でも、しようばいを失うかどうかというようなせとぎわでは、正しい判断をうしなうものである。とんでもないうらみをいだくようになるものである。

菜の花ばたの、あたたかい月夜であった。どこかの村で春祭りのしたくに打つ太鼓たいこがとほとほと聞こえてきた。

巳之助は道を通つてゆかなかつた。みぞの中をいたちのように身をかがめて走つたり、藪の中をすて犬のようにかきわけたりしていった。他人にみられたくないとき、人はこうするものだ。

区長さんの家には長いあいだやつかいいなっていたので、よくその様子^{ようす}はわかっていた。火をつけるにいちばん都合のよいのは藁^{わら}屋根^{やね}の牛小屋^{うしこや}であることは、もう家を出るときから考えていた。

母屋^{おもや}はもうひっそりねしずまっていた。牛小屋もしずかだった。しずかだといって、牛はねむっているかめざめているかわかったもんじゃない。牛は起きていてもねていてもしずかなものだから。もっとも牛が眼をさましていたって、火をつけるにはいっこうさしつかえないわけだけでも。

巳之助はマッチのかわりに、マッチがまだなかったじぶん使われていた火打^{ひうち}の道具を持ってきた。家を出るとき、かまどのあたりでマッチをさがしたが、どうしたわけかなかなかみつからないので、手にあたってのをさいわい、火打の道具を持ってきたのだった。

巳之助は火打で火を切りはじめた。火花は飛んだが、ほくちがしめっているのか、ちっとももえあがらない

のであった。巳之助は火打というものは、あまり便利なものではないと思った。火が出ないくせに力チ力チと大きな音ばかりして、これではねている人が眼をさましてしまうのである。

「ちえッ」と巳之助は舌打^{したう}ちしていった。「マッチを持つてくりゃよかった。こげな火打みてえな古くせえもなア、いざというときにまにあわねえだなア。」

そういつてしまつて巳之助は、ふと自分のことばをききとがめた。

「古くせえもなア、いざというときまにあわねえ、：

…古くせえもなアまにあわねえ……」

ちようど月が出て空が明るくなるように、巳之助の頭がこのことばをきつかけてにして明るく晴れてきた。

巳之助は、いまになって、自分のまちがっていたことがはつきりわかった。——ランプはもはや古い道具になつたのである。電燈という新しいいっそう便利な道具の世の中になつたのである。それだけ世の中がひ

らけたのである。文明開化が進んだのである。巳之助もまた日本のお国の人間なら、日本がこれだけ進んだことを喜んでいいはずなのだ。古い自分のしょうばい が失われるからとて、世の中の進むのにじゃましよう としてたり、なんのうらみもない人をうらんで火をつけ ようとしたのは、男としてなんといい見苦しいざまで あったことが。世の中が進んで、古いしょうばいがい らなくなれば、男らしく、すっぱりそのしょうばいは すてて、世の中のためになる新しいしょうばいにかわ るうじゃないか。――

巳之助はすぐ家へとつてかえした。

そしてそれからどうしたか。

ねているおかみさんを起こして、いま家にあるすべ てのランプに石油をつがせた。

おかみさんは、こんな夜ふけに何をするつもりか巳 之助にきいたが、巳之助は自分がこれからしようとし ていることをきかせれば、おかみさんがとめるにきま

っているので、だまっていた。

ランプは小ささまざまのがみなで五十ぐらいあった。 それにみな石油をついだ。そしていつもあきないに出 るときと同じように、車にそれらのランプをつるして、 外に出た。こんどはマッチをわすれずに持って。

道が西の峠にさしかかるあたりに、半田池という大 きな池がある。春のことでいっばいたたえた水が、月 の下で銀盤のようにけぶり光っていた。池の岸にはは んの木や柳が、水の中をのぞくようなかっこうで立 っていた。

巳之助は人気がないここをえらんできた。

さて巳之助はどうするのだろうか。

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、 それを池のふちの木の枝につるした。小さいのも大き いのも、とりまけて、木にいっばいつるした。一本の 木でつるしきれないと、そのとなりの木につるした。 こうしてとうとうみんなのランプを三本の木につるし

た。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろがず、もえ、あたりは昼のように明るくなった。あかりをしたってよってきた魚が、水の中にきらりきらりとナイフのように光った。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

と巳之助はひとりでいった。しかし立ちさりかねて、ながいあいだ両手をたれたままランプの鈴すずなりになった木をみつめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月としつきなじんできたランプ。

「わしのしょうばいのやめ方はこれだ。」

それから巳之助は池のこちら側の往還おうかんにきた。まだランプは、向こう側の岸の上にみなともっていた。五十いくつがみなともっていた。そして水の上にも五十いくつの、さかさまのランプがともっていた。立ちどまって巳之助は、そこでもながくみつめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。

やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つひろった。そして、いちばん大きくともっているランプにねらいをさだめて、力いっぱい投げた。パリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前たちの時世はすぎた。世の中は進んだ。」

と巳之助はいった。そしてまた一つ石ころをひろった。二番目に大きかったランプが、パリーンと鳴って消えた。

「世の中は進んだ。電気の時世になった。」

三番目のランプをわったとき、巳之助はなぜか涙なみだがうかんできて、もうランプにねらいをさだめることができなかった。

こうして巳之助はいままでしょうばいをやめた。それから町に出て、新しいしょうばいをはじめた。本屋になったのである。

× × ×

「巳之助さんはいまでもまだ本屋をしている。もっともいまじゃだいぶ年とったので、息子が店はやっているがね。」

と東一君のおじいさんは話をむすんで、さめたお茶をすすった。巳之助さんというのは東一君のおじいさんのことなので、東一君はまじまじとおじいさんの顔を見た。いつのまにか東一君はおじいさんのまえにすりなおして、おじいさんのひざに手をおいたりしていたのである。

「そいじゃ、のこりの四十七のランプはどうした？」と東一君はきいた。

「知らん。つぎの日、旅の人がみつめて持ってったかも知れない。」

「そいじゃ、家にはもう一つもランプなしになっちゃった？」

「うん、ひとつもなし。この台ランプだけがのこっていた。」

とおじいさんは、ひるま東一君が持ち出したランプをみていった。

「損しちゃったね。四十七もだれかに持ってかれちゃって。」

と東一君がいった。

「うん損しちゃった。いまから考えると、何もあんなことをせんでもよかったとわしも思う。岩滑新田に電燈がひけてからでも、まだ五十ぐらいのランプはけっこう売れたんだからな。岩滑新田の南にある深谷ふかやなんという小さい村じゃ、まだいまでもランプを使っているし、ほかに、ずいぶんおそくまでランプを使っていた村は、あつたのさ。しかし何しろわしもあのころは元気がよかつたんでな。思いついたら、深くも考えず、ぱっぱとやってしまったんだ。」

「ばかしちゃったね。」

と東一君は孫だからえんりよなしにいった。

「うん、ばかしちゃった。しかしね、東坊——」

とおじいさんは、きせるを膝ひざの上でぎゅツとにぎりしめていった。

みた。

「わしのやり方はすこしばかだったが、わしのしょうばいのやめ方は、自分でいうのもなんだが、なかなかりっぱだったと思うよ。わしのいいたいのはこうさ、日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなったら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古いしょうばいにかじりついていたり、自分のしょうばいがやっていたむかしの方がよかったですといったり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地のねえことはけっしてしないということだ。」

東一君はだまって、ながいあいだおじいさんの、小さいけれど意気のあらわれた顔をながめていた。やがて、いった。

「おじいさんはえらかったんだねえ。」

そしてなつかしむように、かたわらの古いランプを

「おじいさんのランプ」

※『新装版 新美南吉童話集2 おじいさんのランプ』（2012年・大日本図書株式会社）所収の「おじいさんのランプ」をもとに一部、漢字表記とルビを編集しました。